

巻頭  
言

## 週刊新潮を読んで育った

会長 山崎 學



『週刊新潮』を創刊した齋藤十一は、1914年2月11日北海道忍路郡塩谷村（現・小樽市）に生まれた。齋藤家は代々東京・多摩地区の鶴川村（現・町田市）で造り酒屋を営んでいた。父誠之助は日本大学夜間専門部を卒業し、家業を継ぐことなく東京瓦斯（東京ガス）に技師として就職し、やがて設立された北海道瓦斯に出向した。1911年長姉の初枝が生まれ、1914年十一が誕生する。その後、齋藤一家は父の転勤で大森、浅草、八丁堀と転居する。小学4年生になった十一は通学途中で大きな屋敷から聞こえる音楽に感動し、毎日寄り道して耳をそばだてるようになる。1927年旧制麻布中学に進学したが、暇さえあれば銀座に出て楽器店をのぞき、名曲喫茶で音楽に触れるようになった。

麻布中学を卒業した十一は海軍兵学校、旧制一高、旧制松本高校を受験したが、いずれも失敗して早稲田第一高等学院に入学し、早稲田大学理工学部に進学した。ここで同級生の白井重蔵の影響を受けて文学に夢中になり、かつて家族で夏休みに滞在していた千葉県の吉尾村（現・鴨川市）の寺に1年間滞在して歴史書・文学書を読みふける。

妹二人を相次いで亡くした十一は「ひとのみち教団」に入信し、新潮社の佐藤義亮の知遇を得る。千葉の寺で1年を過ごした十一は、早稲田大学には復学しないで佐藤義亮の孫亮一（あきら）の家庭教師になり、1年後の1935年、21歳で義亮に薦められるまま新潮社に入社する。ちなみに1935年は文藝春秋が「芥川龍之介賞」と「直木三十五賞」を創設した年であり、文壇では島崎藤村、川端康成、宇野千代、武田麟太郎、井伏鱒二といった作家たちが活躍していた。

入社した十一は1942年まで倉庫係として勤務しながら世界文学全集を読みふけた。1942年十一は戦火が拡大し人員が不足する中で編集の仕事に携わるようになる。編集担当となった十一は会津八一、三好達治、伊藤 整、河盛好蔵、和辻哲郎達の知己を得る。この縁で伊藤は1944年新潮社文化部企画部長になり、河盛は終戦後に十一が復刊させた『新潮』の顧問を務め、和辻は1950年十一が創刊した『芸術新潮』の顧問に就任している。さらに十一は河盛の助言で坂口安吾の「墮落論」「白痴」、太宰治の「斜陽」を世に送り出している。

『芸術新潮』を創刊した十一は、次いで1956年に『週刊新潮』を創刊し、五味康祐の「柳生武芸帳」、谷崎潤一郎の「鴨東綺譚」、大佛次郎の「おかしな奴」の三大連載小説を掲載して読者の

目を引きつけた。また新人を発掘し、1958年第39回直木賞を「花のれん」で受賞した山崎豊子の「ぼんち」「華麗なる一族」、『新潮』で発掘した瀬戸内晴美の「女徳」、柴田錬三郎の「眠狂四郎」、松本清張の「わるいやつら」、梶山季之の「ぼるの日本史」を世に送り出している。その後、1981年に『FOCUS』、1982年に『新潮45』も創刊している。

『週刊新潮』は1956年創刊以来の愛読者である。高校2年当時に寄宿先の叔父が購入しはじめたのがきっかけである。「週刊新潮は明日発売です」というテレビのコマーシャルを今でも鮮明に憶えている。1960年から掲載が始まった「黒い報告書」は今でも購入すると、敬愛する高山正之の「変見自在」の次に愛読している。これまで新田次郎、城山三郎、井上光晴、内田春菊、中村うさぎ、岩井志麻子等が執筆し、欲望に翻弄される人間の悲しい性を描写しているが、これは十一が目指した「女、金、権力」に執着する人間を暴く新潮ジャーナリズムの真骨頂だと思っている。

#### 〈参考文献〉

森 功：『鬼才 伝説の編集人 齋藤十一』（幻冬舎、2021年）